

コリングウッドの歴史叙述 (その1)

——歴史的過程に内在する原理について——

河 瀬 明 雄

Collingwood on Historical Narration and Its Own Inner Logic, PART I

AKIO KAWASE

かつて、私は過去の出来事を説明する方法としてコリングウッドが用いた *inside/outside* 二分法の由来を尋ねることによって、彼が主張した歴史説明の意味を、歴史に関する因果的把握の仕方との関連において、解明しようとしたことがある。(長崎大学教養部紀要・人文科学・第六巻1966) しかし、そこでは、こうした彼の手続きが、歴史認識の論理から必然的に考えられたものか、あるいは、歴史研究(特に彼の考古学研究)の実際の作業の中から、帰納的に引出されたものか、といった問に力点を置いたため、問題の *inside/outside* 二分法と、因果に関する彼の立場との関係についての解明は、突込みが不足していた。さらに、あの論文の中で、角度を変えて、コリングウッドの実際の歴史叙述の内容について検討することを約束していながら (*ibid.*, p. 12), 今日まで発表する機会を持たなかった。そこで、この小論では、歴史における因果的関係の問題をも含めて、主としてコリングウッドの歴史叙述について、その後、コリングウッドに関するすぐれた幾つかの研究に接することができ、また私なりにコリングウッドの著作を読み返えす中に、次第に形を整えてきたことをふまえて、若干論ずることとする。

ある人たちによると、コリングウッドは、原理的に、過去の経験を再行することによって、歴史を理解することができると考えている; つまり、ある行為の歴史的意義を評価することは、とりもなおさず、その行為者が行った行為の理由を発見することであるとみなし、従って、歴史の説明は、行為者の意図を知ることができれば、それで一応完了するとコリングウッドは考えていたという。

しかし、一般的な歴史叙述の性質からみて、そこには、当然歴史性の重要な要素であるところの、意味をもった時間的経過——持続・連続と、その対立項としての断絶・変化を含む——が大きく欠損しているのではないか、という批判がでてくる。すなわち、歴史叙述は、単に過

去の出来事を時間順に羅列するだけでこと足りるというものではなく、この点、コリングウッドの場合、彼が権威（典拠）を無批判に採用すること（過去の歴史家が記している事実を権威として、そのまま容認し、それらを繋ぎ合せて、歴史を構成するという、所謂「鉄と糊の（で作られた）歴史」）を徹底的に拒否し、一つ一つの過去の事実（というよりも、むしろもっと正確にいうと、過去の事実の現存としての証拠）を、あたかも自然を拷問にかけて、その本質を解明するという方法と同じ遣り方で問いつめてゆくという方向を採っているが、そのために全体の流れの中での、個々の出来事のもつ意味を問題にするという点が、稀薄になったのではないかとの批判が生れてくるのは当然であろう。

また「歴史家は、その歴史の物語＝筋 *story-line* を苦心して作る中で、その *story-line* に沿って書いてゆくところの出来事について考える。ところが、逆にそうした出来事を起こした当の本人たちは、その物語については何も知らない。」（HASKELL FAIN, *Between philosophy and history*. 1970, p. 273）という立場からすれば、前記のようなコリングウッドの歴史的出来事の理解に関する原理は、救い難い欠点をもったものといわざるを得ない。すなわち、出来事を惹起した個人の思考（意図・目的）の一つ一つについて、それをいかに正しく理解し得たとしても、それでは歴史の推移は、少しも明らかにならないからである。

しかも、この二つの批判は、全く無関係のものではないと思われる。時間的経過の中に、それぞれの出来事を位置づけることは、同時に、その経過の必然性を認めての上でなければならない。「一つの問題から、次の問題への叙述的發展の筋道がなければ、物語としての構成をもった歴史叙述を作ることはできないだろう。というわけは、簡単なことであるが、そこには始めるべき物語がないから。すなわち、そこにみられるものは、それぞれの説明をもった個々の出来事の集合にすぎない。」（*ibid.*, p. 273）ということは、誰が考えても明らかなことであるから。つまり、コリングウッドには、「論理的発展」を示すところの、歴史を作る（構成的）基礎として利用される出来事の経過（物語＝筋）が欠けているということである。こうした指摘は、コリングウッドの歴史叙述の理論および実際が、上述のような性質のものであるならば、確かにその弱点を突いたものと評価してよいであろう。

ところで、今日まで、コリングウッドの歴史を取上げた数多くの論文（勿論その総てではなく、入手し得たものに限られるが）を読んで気のつくことは、それらの殆んどが、歴史認識に関する問題を取扱い、そこで、コリングウッドの主張を論難したり、弁護したりしている点である。（しかし、この点に関して述べるには、新たに、別の独立した論文、たとえば、「コリングウッド論を論ず」とか「コリングウッド批判の意味」とかいったものが必要となるであろう。）これからのみ判断すると、彼に対する批判は、あるいは的を射ているかも知れないが、歴史における論理的発展、あるいは、歴史叙述の論理について、コリングウッドは全然考慮に入れなかったのか、それとも何らかの形で、それらに触れているのか、これを探ぐり、もし考慮していたとしたら、それはどうゆうものであり、またそれは、彼の歴史理論全体の中で、どのように位置づけられていたかということを明らかにするのが小論の目的である。

歴史哲学には、歴史という語そのものも持っている曖昧さとも関連して、展望的 *speculative* と、批判的 *critical* の二つの面がある。その中で、批判的歴史哲学は、歴史家自身の研究の性格を明らかにしようとして、その使用する基本概念を分析し、歴史家の懐いている根本的信念について批判、検討を加えるものである。そのために次のような幾つかの問を尋ねる。すなわち、(1)歴史学と自然科学との関係如何。(2)歴史家は、過去をどのように説明するか。(3)歴史的知識は客観的なものとなり得るか。(4)歴史家は、ある出来事の無数にある原因の中から、真の原因をどのようにして探し出すことができるか。(5)もしできるとしたら、どの程度まで、人間はその未来を変えることができるか、等々。また一方、展望的歴史哲学は、(1)実在としての歴史の型とはどんなものか。(2)歴史のメカニズムはどうなっているか。(3)歴史の目的、歴史の価値とは一体何か、などについて検討する。

このように歴史哲学を二つの分野に分けて考えた場合、コリングウッドの歴史理論・あるいは歴史哲学は、先述したような観点からすれば、間違いなく前者、すなわち批判的歴史哲学にすっぽりと包含されてしまう。すなわち、彼の歴史に関する論は、すべて、歴史事実を如何にして正確に、客観的に把握し、かつ説明することができるかという、歴史認識論の枠内に組入れられることになるが、コリングウッドのものは、果して、歴史に関する実体論について関係がなかったのであろうか。

An Autobiography の中で、彼が晩年、哲学と歴史との和解への試みに全力を傾注し、哲学者が、自己の主題の歴史(変遷)について考えている場合には、彼が考えているのは、まさしく歴史であることを認識すべきこと、また、その時代の歴史思考の基準を損わないような方法で考えるべきことを述べ、さらに、歴史哲学にふれて、これを、歴史的思考によって提起された、特殊な問題を検討する特殊な分野であることを主張した後、歴史の問題を、どのようにしたら歴史的知識は知ることができるか、という問に分類されるところの認識論的問題と、歴史家が対象とする出来事、経過、進歩、文明といった語乃至条件の説明に関する形而上学の問題とに分けている (p. 77)。また *The limits of historical knowledge* (in *Essays in the philosophy of History*, ed. William Debbins 1965) では、Bernard Bosanquet の立場を説明しつつ、歴史における二つの大きな問題として、形の上での不充分さ、換言すると歴史(過去)の不確実性と、内容上の不充分さ、すなわち、歴史の対象が常に移行し、変化するものであるということがあるという。つまり認識論的立場からする懐疑主義と、実体論的立場からする変化、経過についての考察が歴史の重要な課題であることを指摘している (p. 90)。

これらのことからでも明らかなようにコリングウッドは、批判的、展望的という語こそ用いていないが、歴史研究の分野に両者が含まれることをはっきりと認めているのである。しかも、ただ認めているだけでなく、前者は勿論のことであるが、後者についても、これから述べるように考察を加えているのであって、先にも触れたように、コリングウッドを論ずる人の殆んどが、彼の歴史認識に関するものだけに注目し、実体については全くといってよい程、言及

していないのは、研究者個人としてではなく、全体の問題として、誤りではないにしても、片手落といわざるを得ないだろう。

コリングウッドが、過去の人間の歴史を、換言すると、時間的経過の中での人間の論理的発展を、実際にどのように捉え、どのように叙述しているかを検討する場合、我々は、まず、形の上で最も整った一般的歴史叙述として、**Oxford History of England** のシリーズの第1巻にあたる、**Roman Britain and the English Settlement 1936** を挙げることができよう。これは彼と **J. N. Myres** の共著で、彼はその中の **Book I—IV** を分担執筆している。頁数からすると、全体の約 $\frac{3}{4}$ に相当する。**Book I** ローマ征服前のブリテン、**Book II** 征服時代、**Book III** ローマ支配下のブリテン、**Book IV** ローマン・ブリテンの終焉、(なお **Book V** イギリス植民)

しかし、小論の目的が、彼の個々の具体的叙述の模様を細かく分析することよりも、むしろ、そうした彼の叙述を貫いている一般的原理、すなわち、上述したような、時間的経過の中での人間の論理的発展の、まさに論理性、言い換えると、発展の背後にある暗黙の法則性の解明にあるから、その目的のためには、この著書だけでなく、次に挙げる著作も含めて、検討してゆくことが是非とも必要であると考え。すなわち、まず **Oxford History of England** (以下 **OHE** と略記) の原型ともみられる **Roman Britain, 1923** (以下 **RB** と略記) についてであるが、これは前者とはやや違い、彼自身、**An Autobiography, 1939** (以下 **Auto** と略記) の中の **Roman Britain** の章で明らかにしているように、一つの問題、つまりブリタニア文化がローマ化したことの意義、およびそれと密接な関係にあるケルト芸術の再生を、どのように理解するのが正しいかという問を設定し、これを軸にして、ローマン・ブリテンの全体像を論じている。また **Speculum Mentis, 1924** (以下 **SM** と略記) のプロローグで述べているヨーロッパ精神の展開の概略も、**Idea of History, 1946** ed. **Knox** (以下 **IH** と略記) に収録されているヨーロッパ史学史の叙述(歴史の概念についての歴史的、批判的素描)や、同じ **Knox** の編になる **Idea of Nature 1945** (以下 **IN** と略記) の中で述べているヨーロッパにおける宇宙観の変遷の記述と共に、広く歴史叙述と考えてよいであろう。そこで、まず論を進めてゆく順序として、それぞれの著作の叙述の実際について、問題点に沿いながら、その概略を記すこととする。なお、後で詳しく論じる際に重要と考えられる問題を含んだ箇所には下線を施し、また《》の中は、私の考えを記したもので、コリングウッドのものと混乱しないよう区別するために用いた。

II

(I) 芸術にみられる Romanization と Celtic revival の問題を中心に

<Roman Britain>の叙述

この書の中で、コリングウッドは、ローマ占領下のイギリス人の生活全般について、ローマ軍による征服、占領の過程、都市および地方での生活の実態、芸術、言語、宗教等の変遷につ

いて概略している。そしてその中で、特に彼が取上げた主題は次の点であった。すなわち、ローマ人によるブリテン占領は、森林と沼地の広大な土地に、ケルト語を使う野蛮人が、ローマ軍によって征服されてる世紀間過ぎたが、その間、この地方におびたしい数のローマ人が流入した。そうしてローマ人がゴート族に悩まされた頃、この島から、まず軍隊が呼び戻され、文官、移住者たちは安全の保障がなくなったため、皆こゝから撤退し、再びケルト人は自分の国をもつことができた。つまり、学ぶべきものも、失うべきものもなく、ローマ人は来て、征服し、そして退去し、ブリテンには僅かに彼らが築いた構築物の破壊跡を除いては、みるべきものは何もなくなかったのか。ローマ人とケルト人の関係は、現代史に例をとると、イギリスがスーダンを占領したことによって起った、両国人の関係と同じように、深い溝があったのかということである。すなわち、コリングウッドは、ローマ軍隊による占領中、一体ブリテンでは何が起ったかを問い、それに対して、ローマ占領中にブリテン人がローマ人になったこと、文明や言語、あるいは愛国心といった感情の上で、ローマ人になったが、それと同時にブリテン人はあくまでブリテン人であって、ブリテン人でなくなったわけではない、要するに、帝国のコスモポリタンの生活における彼等のかかわり方は、彼等が初期にもっていた性格や特質を沈めたり、抹殺させてしまうようなことはなかったとし、そうした事態がどのようにして生じたか、を明らかにすることが、この書 Roman Britain の目的であると述べている。

しかも、このことは、遠い過去の出来事を解明するためのものではなく、その後の、ひいては現在の自己を理解する上で非常に大切なこととコリングウッドは考えているのである。

ところで、彼はこの問題を特に芸術の章で可成り詳しく検討している。すなわち、ケルト芸術の栄えていたブリテンにローマ人が侵入すると、ギリシア・ローマの芸術がこの地に入り、やがて、ローマン・ブリテンという一つの新しい芸術様式を生み、やがてそれも衰えて、再びケルト芸術の様式が復活するという歴史的経過の中で、彼が問題としたのは、一つはケルトとローマの混合によって生れたローマン・ブリテン芸術（文化）の特色は何であったかということと、もう一つは、このローマ化の現象が完全に達成されないで、時の経過と共に次第に陰ってゆき、丁度曙を迎えながら、真昼に至らない状態で終った理由は何かということである。《別の角度からすると、これは混合芸術から再びケルト芸術があらわれてる 問題の解明であり、一般化していえば、歴史的経過としての持続と変化に関する説明である》

まず前者、すなわち混合芸術生成の経過について、コリングウッドは、家畜飼育家の言葉を引用して、「二つの別々の種が結合した場合、第一代交配種は勢力旺盛で、ある程度双方の親の特質を受け継いでいるが、この第一代交配種からさらに繁殖をつづけてゆくと、種は次第に低下してゆく」ように、これは文化にもあてはまり、ギリシア・ローマの芸術的伝統がケルトの伝統とぶつかり合った時、ケルト的でもない、またローマ的でもない、そうかといってコスモポリタンのでもない、二つの混合、不完全・不安定な混合が生じ、それは新しい力強い型を産み出し、芸術的価値の可成り高い、真のローマン・ブリテン芸術へと成長しつつあったが、結局中途半端に終わってしまった、という。また後者、すなわち、混合芸術からケルト再生

への経過について、4世紀になって、ケルトの特色をもったものが再び出現してくるまでの経緯を「1世紀後半のローマ化による土着（ケルト）のものの追放」から「ローマ化の薄い膜を通して、再び自己（ケルト）を主張しはじめ」、「ローマン・ケルト壺にみられるようなローマ化からの脱却」へ、そして最後に「ケルト的要素の圧勝」という推移で述べている。たとえば、証拠として最も多く現在残っている壺についてみると、それはローマ人が来る前までは非常に巧妙に作られていた。すなわち、形はふっくらとした胴の部分、締めつけたような首は外側に反った外縁をもっている。またそこに描かれている模様は、格子風にならんだ直線の平行線のものと、円や螺旋、花づな模様など、優美な曲線で、所謂二次元的特色を有する。こうしたものが、ローマ軍によるブリテン占領という軍事的、政治的圧力の下でのローマ文化の導入によって、ローマ文化が一時大きな力を振った時点では、輸入壺（**Samian, Coarse** 両壺）が幅をきかせたが、やがて2世紀のはじめに大変革が起った。すなわち、130年頃に、旧ローマ壺が消え、それに代って新しい種類のものが現われた。それはある点ではローマのものに似ており、また別の点ではローマよりもずっとケルト製品に似ていた。ローマ的型がケルト型に近づくことによって、次第にローマ化を脱しはじめたとでもいった有様を物語っている。この現象が2世紀後半から3世紀を通じてみられるが、4世紀になると、また別の新しい形や構造のものが現われた。その特長として、ケルト的傾向が非常に濃厚で、経験豊かな、すぐれた考古学者でも、ローマ征服以前のケルトの壺と間違えてしまうような、そんなものが出てきた。一般化、抽象論にはしることを恐れて、コリングウッドはさらに念を押すように、具体的事例として **Castor** 壺を挙げて説明している。

ロンドンの北西約60Km のところにある **Castor** 付近で作られた、イギリス各地の遺跡で発見される数量から推定して、工場は非常に多かったと考えられる、この壺は、輸入壺の **Samian** 壺と比較してみて、はっきりと同系統のものであることが分る。そこに描かれている動物の群や花の渦巻模様、人物像は全く同じ様式のものである。壺の上部および下部には何も描かれてない。しかし両者の間の差にも注目しなければならない。**Castor** の形はローマの回復ではなくケルトをモデルとした復興である。飾りはローマのもののように打抜型によるスタンプではなく、氷菓子の上の模様のように漏斗を通して絞り出した陶器用の糊（バルボテーヌ）の中か、あるいは柔かい粘土の中で、製作された。このことは **Castor** 壺を作った人が、**Samian** 壺を知ってはいたが、その製作法は知っていなかったこと、それを模倣する中で、彼ら独自の方法を発明していったことを示している。しかも、飾りの形や曲線、活気に満ちた感情表現は、はっきりとケルトを憶わせる。すばらしい芸術とは言えないが、**Samian** 壺の飾りにみられる硬直した、そっけないものに比べて、ずっとローマ征服前の飾りの回復をうかづうことができる。このように、ローマとケルトの壺の両型は、相互に混合して、双方とは異った全く新しい型を生むに至った。あたかも、二つの化学合成物が結合して、二つの新しい化学合成物が生まれ、その場合、この新しい二つの化学合成物は、それぞれもとの両者から何らかのものを引出しているように、ケルト的装飾の伝統が、ローマのリリーフ技術や釉薬の使用と結びついて、

ケルト的形狀とローマ的釉薬，ローマのリリーフ飾りとそれを表現するのに用いられたケルト精神でもって作られた **Castor** 壺が出現したことをコリングウッドは論じているのである。

さらに彼は、金属製品に言及し、ケルト芸術の伝統がローマ壺の技術の媒介によって、再び自己（ケルト）を主張しはじめた **Castor** 壺にみられると同じ現象が、金属製品にもみられ、ローマとケルトの両要素の混合によってローマン・ブリテン金属細工という一つの派を生み出したことを明らかにしている。

＜Oxford History of England＞の叙述

この中の芸術の章で、コリングウッドはローマ占領下の芸術全般についての大きな傾向を述べている。従って、先の **Roman Britain** の記述程には具体的でないが、彼の考えている核心を握むためには、前者に劣らず有益である。ローマがブリタニアに侵入してくる以前の工芸は、大陸の **La Tène** 様式の流れを汲む一派に属していた。すなわち、モチーフとして自然を素材とした名残りとともみられる蓮、耶子や奇妙なおそろしい形相の人の顔、鳥や獣などが描かれ、充実感にあふれた初期のものから、次第に抽象的な様式へと移行して第二期を迎え、それが紀元前3～2世紀にブリタニアの地に移し植えられた。すなわち、S字形および螺旋形（原型は蔓）のモチーフと、デリケートな感じをもった線形を主体としたもので、この現象をコリングウッドは次のように述べている。これは思想の歴史にはしばしばみられることであるが、歴史のある特定の時期に、**La Tène** の伝統がイギリスの土壌に移植されその結果、大陸での発展のカーヴの切線にそった直線であるかのようにイギリスで（連続して）発展していったのである。こうしてローマ征服以前の芸術、すなわち背景や色彩を余り重視しないで、直線や曲線による抽象的様式を重んずる二次元の芸術が生れたのである。ところが、ローマ軍の侵入後、趣好において普遍化によって墮落した古典芸術の基準や商業化によって毒された地方性は、流行を追う人々の心を支配し、生産面では大量生産へと移行して、手作りの良さが失われていった。その結果、北部を除いて **La Tène** の芸術は消滅し、やがて北部地方からもなくなってしまったのである。ローマ人はブリテン人に石を刻むこと、壁にプラスターで描くこと、および床をモザイクで飾ることを教えたが、その結果は大変みじめで、機械的、模倣の強い三級品しか生産できなかった。ところが、ローマ占領時代の初めに消滅した筈のケルト芸術の様式をもった作品が、年代的にみてこの時期を過ぎた時代の遺跡である、あちこちの墓から不思議にも再び現われてくるのである。この事実を前にして、コリングウッドは、どこにケルト芸術の種子が保存されていたのか。また何故これが3世紀半もの間、完全に隠れていたのか、という問を提起している。そして、この問をさらに次のような二つの問に改めて、問い直している。すなわち、(1)イギリスの **La Tène** 芸術のような、巧く確立され、発展したものが、何故ローマ征服に際して生き残ることに失敗したか。何故、新時代に生き、栄えつづけなかったのか (2)何故彼らが採用したローマ様式の枠の中で、すばらしい作品を生む才能を発揮しつづけなかったか。《ケルト再生の問題をこのような二つの問にコリングウッドが、何故分けて考え

たかを追求してゆくと、そこに彼が主張した歴史的過程を貫いて存在する原理を解く鍵が潜んでいるように思われる。上記の二つの問を一般化してみると、(1)はある芸術様式（伝統）が他の様式（伝統）と接触した場合、前者が断絶してしまうというものであり、(2)は同じ現象について、元の様式（伝統）は他の影響をうけて変化しつつも連続するというものについての問題である。》

さてコリングウッドは、このあと、大陸の様式とブリテン土着のものとの間になされたすばらしい結合について述べている。曲線の純粋に抽象的操作で、すぐれた離れ業ともいべきものを作り出したケルト芸術が成立するためには、恵まれた環境（社会基盤）と、芸術的素質が必要である。しかも、これが絶頂を過ぎて下り坂となり、崩壊の一手手前まで進展していったことから、侵入者の粗雑な芸術に遇った時、侵入と同時に、生き延びることは不可能な状態であった。芸術の生命は到達できる最高頂までゆくと、その後は残された展開の狭い可能性を燃え尽して、やがて亡んでゆく。これからすると、ケルト芸術がローマ人による征服で消滅したことも、ローマ化の行われたローマの辺境で、暫く生存し、やがて消滅していったこともすべて当然なことである。そこで再び問題となるのが(2)の点で、芸術的才能の連続、変化、消滅については、生物学上の遺伝による説明はあてはまらなと彼は言う。つまり、芸術は生物学的現象ではなく、歴史現象である。それなのにこれを人種のような生物学上の概念で解こうとしても解けないし、そればかりか反って分からなくなるとさえ述べている。《これは前述の **Roman Britain** の項でみた生物学的立場、すなわち、一代交配種を引用しての説明と全く矛盾するわけで、両者の関係はさらに検討してゆかなければならない。》

人々の歴史的所有である文化や伝統は、生物学的性格が遺伝されてゆく方法とは全然別の方法で継承されてゆく。彼によると、これこそまさに歴史的過程の問題として考えなければならぬものである。すなわち、人々の芸術的力というものは、すぐれた芸術を生み出すために、人人に生れながらに備わる力ではない。それは人々が、何を芸術上の問題として設定しなければならぬか、そして、いかにしたらその問題が解決できるかを教えながら、世代から世代へと手渡してゆくところの伝統なのである。しかも文化の場合は、過去の経験が未来へ影響を及ぼすところの力の持続であって、この点で経験の意識的記憶に依存する学派の持続（継承）と大きく異っている。

人間の生活では、過去における大きな経験は、そうした経験をもった世代が、その子供たちに、その経験がどうゆうものか全然知らないにもかかわらず、未来を見つめるように教える方法に影響するわけで、新しい芸術が、この特殊な経験の永続性や発展の機会を与えて呉れるものであれば、その新芸術を歓迎し、逆に与えて呉れない場合には、なまくらな態度で接して、巧く表現し得ないように、その対応の仕方によって、というよりはむしろ、衝撃を与える側の芸術的エネルギー如何によって成功もし、失敗もするのである。たとえば、その成功例としては、**Anglo-Italian Madrigal** や **Flemish-Italian painting** があり、またこれを今問題にしているイギリス人に例をとると、ローマの伝統をそれ自身の芸術経験の中に編み込んで、次の

段階へと発展させることができた筈であるのに、失敗してしまった。それは実際問題として、ローマ芸術の特色とケルトのそれとが余りにもかけ離れすぎており、ローマ人が教えたものはブリテン人が望んでいたものではなかったとして、コリングウッドは、ブリテン人の芸術上のローマ化は、ローマ芸術が自己の基準をブリテン人に押つけるのに失敗したのではなく、《むしろ、一時これには成功したわけである》、またブリテン人が芸術的素質に欠けていたからでもなく、《実際には充分にあった》、教師と生徒が互に誤解し合ったために、悲しい物語となったという。さらに彼は、ローマ占領末期のケルト芸術再生の問題に移り、再生とは何かという問題に取り組んでいる。すなわち、ケルト芸術の *La Tène* 様式の特色は、一言でいえば、シンボリックであり、自然をモチーフとして使用する際、事物の外観でなく、芸術家のエモーションの表現の手段として、これを用いたところの内面的、心的態度をもっていたが、ローマ芸術の特色は、それとは全然反対の、事物の様態そのものを観察し記録することに関心をもっており、芸術家の心は外向的であった。しかも両者の関係を実際の歴史の過程の中でみるとブリテンの芸術家たちが *La Tène* 芸術の世界を意気揚々と発見していた丁度その時、ローマの自然主義の領域に包み込まれたブリテンは、これを素直に受け容れようとしたが、その精神はなお依然としてシンボリックな芸術理念で占められていたのである。あたかも *La Tène* 芸術の特色であるシンボリズムが、渦巻のような働きをした。すなわち、その渦巻の中へ、ローマの芸術的伝統の断片が投入られた。そして、いたるところでこれらの断片は、この渦巻の中に沈み、やがてシンボリックな芸術のための素材の中に変形させられている。また渦巻に吸込まれまいとして抵抗し、その外様を変えずに漂った場合には、芸術的素質を全く欠いたとみられる人々によって、ローマの作品の、つまらぬ模倣が生れたのである。そして、自然主義的なローマ芸術自体が死にかかっている時、その理念を押付けるエネルギーがローマの辺境の地の一つであるブリタニアで、次第に弱っていった時、ブリテンはようやく自由となったのである。これが再生という現象となって現われたのである。そこでは、ブリテンの芸術家が習うものは殆んどなく、むしろ多くのものを忘れていったのである。そうして、彼らはシンボリックな芸術の理念をそのまま保持してきたし、そしてついにそれを実現する仕事を再びはじめることができたのである。その仕事は中断されることなく進められた。

＜Autobiography＞の叙述

コリングウッドは *Autobiography* の中で、特に *Roman Britain* という一章を設けて、その後半の部分で *Roman Britain, Oxford History of England* で彼が書いてきたことを回顧しつつ、それらを一般的な原理から説明し、彼の歴史理論の中心テーマの一つであったと考えられる歴史的過程の意味を明らかにしている。従って、前二者と重複する点もあるが、重要な問題なので、彼の叙述に従ってみてゆくことにする。

ローマ征服前のブリタニアでは、ケルト様式が、たとえば美術工芸の分野で、非常に高度の芸術的才能を有していたが、征服後は地域的には程度の差はあるが、ローマ帝国領の他の地方

でみられるコスモポリタンの様式に置き換えられてしまい、さらに征服の末期頃から所謂「ケルト再生」という現象が現われたことは、考古学者 Harverfield によって、夙に指摘されているが、この周知の事実はどう解釈したらよいであろうか。すなわち、ブリテン人のもっているケルト的芸術的才能を、文化的スチーム・ローラーが平たく熨してしまい、ブリテン人はローマ帝国の芸術的才能を採り入れるようになったが、しかしる世紀経た後に再びケルト的才能になぜ戻ったのか。また実際にそれはどのようにして戻ることができたのだろうか。一般的にいて、死んでしまった伝統が、古風を真似る風潮の勃興による復活の場合以外に、どういう理由で、再び生命を取り戻すことができるのか、と問いかけ、それに対する三つの答を挙げて、批判している。すなわち、(1)残存は全く普通の現象であるとする説。この論によると、ケルト装飾の伝統は絶えることなく、ずっと続いていたというのが、残念にもそうした証拠は見あたらない。(2)すべてのケルト芸術がスチーム・ローラーに打ひしがれたわけではないという説。しかし、もしそうならば、なぜケルト芸術の伝統が非征服地スコットランド地方に残らなかったか、その理由を説明することができないから、この論も失敗である。(3)ケルト芸術はケルト的気質の所産で、この気質は、ある状況下においてのみ芸術的表現が開花するという説。これに対して彼は、きびしく反対している。すなわち、気質というような漠然たるものをもって、理解しようとしても、それは不可能である。《この点は、先の *Oxford History of England* で述べているように、人種のような生物学的概念で問題を解こうとすれば、かえって問題を暗闇に投入れることと等しく、ますます困難になるだけであると批判していることと合致する》暗闇の中にみられるものは、歴史ではなく、歴史の否定である。つまり、歴史的問題の解決ではなく、解決したという幻想を与えるだけにすぎない。そうして、この問題を本当に解くためには是非とも、原理的なものを還元する必要があるとして、コリングウッドは歴史的過程という一般的事象に関する原理を論じている。それは次のようなものである。

「P₁からP₂への歴史的变化を含む過程は、表面上は全くP₂になってしまっている歴史的状態 an historical state of things の中に蒔入されたP₁の、変らない残りを留めている」

この命題については、後で詳しく論じることとして、こゝでは、コリングウッドが述べていることを今少し追ってみると、上記の命題中の独特の意味をもった、蒔入れという現象について、これは決して漠然とした、不明確な概念ではないとして次のような例を挙げている。なお例題名は私が便宜上つけた。

例 1. 喫煙の習慣について：タバコを喫っていた人が、ある時、喫うのを中止した。しかし、喫いたいという彼の欲求は依然として残っている。この人の禁煙生活での、この欲求こそが、彼が「蒔入れされた」と呼んだものである。これは生残り、効果を生む。しかしこの効果は、この人が禁煙する以前のものと同じではない。すなわち、喫みたいという欲求は、満たされない欲求の形で存続しているのである。

だから後日この人がタバコを喫った場合、決して禁煙しなかったということを証明するには及ばない。彼は欲求を失っていなかったからそうなのであり、その欲求が満たされない理

由が消えれば、再びそれを満たすようになるのである。

例 2. 戦争好きな国民とその子孫について：好戦的国民が、その歴史の中でのある危機に際して、全く平和的な国民へ転向したと仮定すると、第1世代では、行為としての戦争は中止したけれども、好戦的な衝動はまだ生残っている。しかし、これをさらに厳しく規制してゆくと、すべての人間が全く、平和的に行動するようになる。かくして、この世代の人々が、その子供たちの道徳教育を行う時、戦争という禁じられたもののしみにふけてはならぬと、用心深く子供たちに話すだろう。「でも、戦争って何んなの、お父さん」と子供が聞けば、父親は戦争の罪悪を強調しつつ、しかし（全然彼の意志に反して）戦争は続いている間は壮大なことであり、やるべきではないということを知らなければ、彼も再度隣国と勇んで戦うだろうと無邪気な子にやさしく話してやる。そこで子供はすべてを承知する。すなわち、戦争とは何かを知るだけでなく、勿論悪いことには違いないが、それが壮大なことであることも知る。しかし彼らが大きくなったら、その子供たちにこのことをすべて伝える。このようにして、教育による制度や風習の追放、禁止やそれに対する欲求を抑圧することを含めての道徳的理念の伝達は、欲求自体の同時的伝達をも伴うのである。ある場合には、禁止事項の記憶を生かしておくと同時に、その欲求をも生かしておく伝統が絶えてしまうかも知れぬ。こうした伝統の消去は、もし新しい思考や行動の方法が改革者自身成功とみなして満足すべきものであることが分れば、非常に速められるだろう。また反対に、新しい思考や行動の方法が、巧く成功しない場合には、先に捨てられた旧い方法は心残りをもって記憶され、その栄光ある伝統はしっかりと生きていることが分るだろう。（未完）

（昭和45年9月29日受理）